

写經

讚佛偈

さんぶつげ

訓読・語義・文意付き

〔解説〕瓜生津隆文

探究社



写經

さんぶつげ

讚頌佛偈

訓読・語義・文意付き

〔解説〕瓜生津隆文

浄土真宗のご門徒で写経をしてみたいと言われる方のために「讚仏偈」の書き方の参考として手本を加えました。

言うまでもなく、現世祈祷を否定する浄土真宗では、除災招福の目的や、先祖への追善供養として経典を書写するということは厳に慎しまねばならないことでもあります。しかし、救われる者の喜びの上から仏恩報謝の一助として、経典を書写することは何ら差し支えないことでもあります。写経は寧ろ積極的であってよいのです。本書を活用していただけるなら幸せです。

なお、本文〈写経〉の手本は旧漢字、下段の訓読については当用漢字となっております。

## 解説 — 讚仏偈について —

財団法人芦屋仏教会館理事 瓜生津 隆文

『無量寿経』の上巻に出る四言八十句からなる偈文で、「嘆仏偈（歎仏偈）」とも言います。かつて世自在王という名の如来が世に現れた時、その説法を聞いたある国王が、国と王の身分を捨てて修行者となり、師である世自在王仏のもとで願を起こすにあたって述べた偈頌、という構成をとります。法蔵と名を変えた修行者が、師仏である世自在王仏の徳を讃える言葉で始まりますが、内容的には、広く仏徳を讃えたものであり、さらに法蔵比丘が、自らも大いなる徳を備えた仏となることを志し、しかも諸仏の国を凌駕する国土を打ち立ててすべての衆生を収め救う旨の誓いを立て、師の証明を請うというふうに展開しています。したがって内容の点から言えば、「誓いの偈」とも言えるものです。

前半部分で仏の徳を広く讃えているという点で「讚仏偈」という名称は当を得たものと言えますが、これを単に、世自在王仏の徳を讃えた「讚世自在王仏偈」と見るならば、讚仏の内容も、我々とは直接には関わりのない彼方の話となってしまうます。また逆に、法蔵菩薩を、自らの内面的真実の象徴と見るならば、阿弥陀仏（および浄土）を内在的に見る自性唯心の邪執として退けられましょう。法蔵菩薩の偉大なる決意の表明は、他力の救いをまっすぐに仰ぐ者にとって、頼もしくも慕わしい生きた文言であると同時に、その言葉には、大乘仏教の核心とも言うべき菩薩の勇猛心、利他の精神が力強く脈打っている点にも心を向ける必要があります。

光顏巍巍

光顏巍巍

威神無極

威神無極

光顏巍巍 威神無極

如是焰明 無与等者

◆訓読

光顏巍巍として威神極まりなし。  
是の如きの焰明、与に等しき者なし。

◆語義

光顏 智慧と慈悲の輝きに満ちた仏のお顔。  
巍巍 非常に気高い様子。  
威神 威神力。仏の自在な力。  
焰明 衆生の闇を照らす智慧のはたらき。

如是燄明

如是燄明

無與等者

無與等者

◆ 文意

世自在王仏よ。

智慧と慈悲に満ちたお顔は

とても気高くあらせられ、

仏のお力は無限です。

その光明のはたらきは

たとえようもなく、

決して並ぶものはありません。

日月摩尼

日月摩尼

珠光燄耀

珠光燄耀

日月摩尼 にち がつ まに 珠光燄耀 しゅ こう えん によう

皆悉隱蔽 かい しつ おん べい 猶若聚墨 ゆ にやく しゅ もく

◆訓読

日月、摩尼、珠光の焰耀も、皆悉く隠蔽せられて、猶聚墨の若し。

◆語義

日月 太陽と月。

摩尼 マニ (Mani)。珠玉の総称。ま

た人間の様々の願いをかなえる  
という如意宝珠を指す。

珠光 摩尼珠の光。

焰耀 太陽や月の光、摩尼の輝き。

隱蔽 おおい隠す。



皆悉隱蔽

皆悉隱蔽

猶若聚墨

猶若聚墨

聚墨 墨のかたまり。まったく色を失

うことをいう。

◆ 文意

太陽も月も、

如意宝珠などの

世間で珍重される宝玉も、

さながら墨のかたまりのように

輝きを失います。

如來容顏

如來容顏

超世無倫

超世無倫

如來容顏 にょらいようげん 超世無倫 ちようせむりん

正覺大音 しやうがくだいおん 響流十方 きやうりゅうじつぽう

◆訓読

如來の容顏は、世に超えて倫なし。  
正覺の大音、響き十方に流る。

◆語義

如來 ここでは世自在王仏をたたえて  
いるが、あらゆる仏（諸仏）を  
内容に含んでいる。

容顏 かおかたち。

超世 この世の次元を超えている。

正覺大音 さとり（覺者）の大音声。  
だいおんしやう

十方 東、南、西、北の四方に、東北、